氏　　名	杉 本 星 子
学位（専攻分野）	博士(文学)
学 位 記 番 号	総研大乙第55号
学位授与の日付	平成１０年9月３０日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学 位 論 文 題 目	南インドの農村におけるカースト内関係としての親族 －コング・ヴ゛ェッラーラの事例研究－
論 文 審 査 委 員	主　査　教　授　立川 武藏 助 教 授　押川　文子 助 教 授　杉島 敬志 助 教 授　田中　雅一（京都大学）

論文内容の要旨

本論文は、今日の南インド社会における親族について、タミルナードゥ州南西部の農村地帯に暮らす農民カースト、コング・ヴェッラーラの事例研究を通して考察することを目的としている。

近年のインド史研究は、イギリス植民地統治の諸政策と現地の人々の対応という相互行為の中で近代のカースト制度が創出されていった過程を明らかにしてインド社会像を大きく読みかえようとしている。人類学のインド研究もまた、先行の研究者の資料分析に密かに持ち込まれた近代イデオロギーをも視野に入れ見直しながら、新たな研究の方向性を模索すべき段階にある。本研究はこのような観点にたって、南インドの親族を近代のカースト制度における親族を新たな角度から捉えようとする試みである。

本論文は、序論と４つの章から構成される本論および結論からなる。

序論では、先行の南インドの親族研究を批判的に概観し、親族を実体的な組織としてではなく、親族関係を基盤にした社会的ネットワークを作り出す行為のメカニズムとして捉えるという視点を明らかにしたのち、インド・タミルナードゥ州南西部コング地方の生態環境と、この地域で社会的に大きな力を持つ農民カーストの一つであるコング・ヴェッラーラについて概説し、コング・ヴェッラーラの親族を村落から国家まで一貫して捉えるためには、村落を越えた社会的ネットワークを構築する場として重要な役割を果たしている地方の寺院に焦点をあてた研究が有効であることを論じている。

第１章では、フィールド調査をおこなったイーロードゥ県イーロードゥ郡ティンダル村の景観と住民構成、カースト関係の現状を述べてから、中核村民であるコング・ヴェッラーラの親族関係と農業を中心とした生活について説明している。

第２章では、ティンダル村の中核村民の寺院参詣の資料を提示し、村人の信仰圏が農耕暦と組み合わされた寺院への参詣行動を通して村、地域、ナードゥ（くに）という三重 の構成をもって拡大していること、そのそれぞれのレベルにティンダル村の人々が特に強い結びつきをもつ中心的な寺院があることを明らかにしている。

第３章では、村、地域、ナードゥ（くに）のそれぞれのレベルの中心的な寺院を取り上げ、寺院祭礼と寺院の管理・運営をおこなう祭祀組織について考察している。村レベルの信仰の中心はマーリヤンマン寺院である。ティンダル村のマーリヤンマン寺院には、村の土地に世襲の土地権をもつ中核村民の９つのイエ（ワラブ）を中心に祭祀組織が形成されている。ティンダル村の中核村民のクラン寺院があるナシヤヌールの町には、コング・ヴェッラーラの７つのクラン（クーッタム）の人々が集まって祭祀組織を構成するマドゥラカーリヤンマン寺院がある。これは祭祀組織の形をとったコング・ヴェッラーラの村連合である。ナシヤヌール地域の村連合は、プーンドゥライ・ナードゥという「くに」の都で地方経済の中心であるセンニマライの町のムルガン寺院の祭礼に参加している。センニマライのムルガン寺院のタイ・プーサム祭礼では、寺院を取り巻く山車通りに、コング・ヴェッラーラの８の村連合とその他 12 のカースト組織が祭屋を設けている。ここにコング・ヴェッラーラが、親族ネットワークと政治・経済的ネットワーク、宗教的ネットワークが重なり合う地方生活圏を舞台に、村、地域、「くに」の諸寺院との結びつきを介して親族ネットワークを基盤とした社会的ネットワークを拡大している状況が明らかにされる。

第４章では、第３章で提示したコング・ヴェッラーラの親族ネットワークの事例を、１）系譜関係の位相、２）出自集団の位相、３）内婚集団の位相において分析している。

１）系譜関係の位相では、個人を起点とした親族関係や婚姻連帯が連鎖したり重層したり、あるいは分裂することによって拡大・縮小し、２）出自集団の位相では、寺院祭祀のための共同体組織という社会関係の場の形成を起点として特定の権益を共有しつつ独占する共同体の分節として出自集団を形成し、３）内婚集団の位相では、カースト分業によるカースト間関係が内婚集団を形成すると共に内婚集団としてのカーストをも細分化してゆくような、親族ネットワーク構築のメカニズムが分析される。コング・ヴェッラーラの親族は、寺院を介して形成されるカースト内の親族関係とカースト間関係の歴史のなかで構築と解体を繰り返す運動態である。最終節では、近年のカースト運動の活発化を背景に、コング・ヴェッラーラのカースト運動組織が、地方の生活圏を超えて、国家が確定したカースト全体に内婚範囲を拡大し、独自の祖国と歴史をもつ血統としてのカーストを実体化しつつある現状を報告している。

結論部では、以上の議論を総括したのち、コング・ヴェッラーラの親族の事例をインド近代のカースト制度におけるカースト内関係としての親族として位置づけ、今日の南インド社会の親族について以下のようにまとめている。近代以降インドが西欧社会の裏返しとして自画像を形成してゆく過程で、生まれを同じくする集団としてのジャーティ（カースト）の血縁意識は、イギリスがインド社会に想定した生物学的な人種あるいは出自としてのカースト観によって強化され、固有の文化と伝統をもつ血統集団としてのカーストが実体化されようとしている。インドの近代に残存した、集団内で平等と民主主義を実現する内婚集団という「伝統的なカースト」像こそまさに、親族と政治、家族と社会、あるいは家族や親族と国家とを「愛の領域」と「闘争の領域」として対立させる近代社会の親族イデオロギーにほかならない。

論文の審査結果の要旨

〈１〉　評価。本論文は、タミル地域の主要農民カーストの一つであるコング・ヴェッラーラの親族について、寺院参詣における親族ネットワークのあり方を手がかりに、近代カースト制度におけるカースト内関係としての親族という新しい観点から分析を加え、一定の成果を生んでおり、さらに、着眼点および現地調査・文献調査に基づく論議の両面において独創的である。したがって、学位を授与するに値するものと審査委員全員が一致して判断した。

〈２〉　内容。本論文は序論、本論（１－４章）および結論より成る。序論は研究目的、先行研究、調査地と資料について述べる。第１章は調査地ティンダル村の概観、親族状況、経済状況について述べ、第２章は調査地における寺院参詣の実態を、月参り、年間祭事暦、寺院祭礼、聖地巡礼、村人の参詣行動等の観点から考察する。第３章は主要調査地ティンダル村の諸寺院、ティンダル村の北西数キロメートルの町ナシヤヌール、ティンダル村の人々が巡礼する聖地センニマライにおける諸寺院の近年の新築・改修、儀礼等に関する報告・考察である。

第４章「親族ネットワークの構築」の第１節では、「親族」に（ａ）日常生活や人生儀礼の遂行によって構築される系譜関係の位相、（ｂ）寺院における儀礼行為の遂行によって構築される出自集団の位相および（ｃ）日常生活や儀礼におけるカースト間関係によって構築される内婚集団の位相の「三つの位相」を想定する。第２節では親族関係（系譜関係）の位相、第３節では出自集団の位相、第４節では内婚集団の位相について検討する。そして、第５節では、地方寺院の改修とその後の儀礼行為の遂行によって寺院を媒介にした親族ネットワークが活性化している現状を指摘する。結論部は、コング地方においてインド社会がイギリス統治時代を通して育んできた「血統としてのカースト」というインド型の近代親族イデオロギーが強化されたと結んでいる。

〈３〉　メリット。本論文は、従来、村落調査が主であった人類学的研究を、村落を拠点としながらより拡大し、村落内に留まらない社会活動をも視野に入れた親族・カースト研究を目指している。さらに、空間的のみならず時間的にもより幅のある歴史研究を目指し、従来の非歴史的な人類学研究の限界を克服しようとした。これは本論文のメリットである。

また、筆者は、系譜関係の遠近の程度にそって親族のネットワークが同心円的に広がっていくという、親族研究において伝統的に採用されてきたモデルを排し、村、地域および「くに」といった地域社会の各レヴェルに存在する寺院における祭祀活動に着目し、それへの参与をとおして親族のネットワークが構築されるあり様を明らかにしている。このような筆者の分析は、カーストや地域概念の形成過程を視野に入れた新しい親族研究の展望をひらくとともに、人類学研究と歴史研究の接点を意識的に組み入れた点でも意欲的であり、貴重な成果を収めたといえる。

〈４〉　問題点。もっとも本論文に問題がまったくないわけではない。例えば、近年、地方寺院における祭祀活動が活性化しているという事象の背後にある政治的、社会的要因の分析が不鮮明である。また、タミル語表記のダイアクリティカル・マークに不整合が見られる。このような問題点は、しかし、学位申請論文としての価値を損なうほどのものではない。